Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2014」
中国招聘感想文

公益財団法人日本科学協会
業務部　国際交流チーム

目　次

櫻井毬子……２

平原紀子……３

倉澤正樹……６

難波千穂美……１２

石丸 大輝……１４

池部菜々子……１５

宇佐美　希……１７

山根芽依……１８

松山　茜……１９

佐藤　瑞貴……１９

櫻井毬子

中国の旅を終えて

「今回の訪中に関して、感想を聞かせてください」

帰国してすぐ、夏の大学生訪中団で一緒だった後輩のMくんから連絡が来た。記者の卵でもある彼は、私との対談をまとめ、年明け最初の記事にしたいのだと言う。私は困惑した。ただでさえ口下手なのに、思うところのたくさんあった今回のような体験を、上手く言葉にできる自信がない。相談の上、彼との共通の友人で今回の訪中七日間を共にした宇佐美さんを交え、スカイプを通じて、夜、三人で対談をすることとなった。

私にとっては、今回で四度目の訪中だった。出発前の私は、いま思うと驚くほど身軽で、心の重荷が全くなかった。それは、日本の青年代表団の一員とはいえ、個人間での温かな交流ができればそれで良いのではないかという思いがあったからだ。日本科学協会の方から、人民大学で悪化する国民感情に関してディスカッションの予定があると連絡をいただいた時にも、特に自分の考えを紙にまとめたり、何か資料にあたったりして準備しようとは思わなかった。その場で、個人としての相手の想いを受け止め、自分もまた率直な意見を発信できればいい、そう思っていた。北京入りしてみると、旅の仲間の九人も、これまで個人の交流に重きを置いてきた人が多いということがわかった。

しかし毎晩のように議論を重ね、時に白酒を酌み交わしながらの本音トークをしていくうちに、私たちの考えは少しずつ変わっていった。日中交流はもちろんだが、日本人同士で話をするという日日交流をしている時にも、いままで見えていなかった中国、そして気づくことのなかった日本にハッとする機会が多々あったのだ。人民大学での議論の続きはホテルの部屋にまで持ち込まれ、南京大虐殺記念館に行った日にはそこで感じたことをお互いに包み隠さずぶつけ合う。皆の意見にじっくりと耳を傾け、時に皆の気持ちをたっぷりのユーモアでときほぐしつつ、核心部分はズバッとつく倉沢さんや、ただひとりの社会人として、皆が気づかないような視点から切り込んでいく平原さんを中心に、議論は深夜まで続いた。

そういう話をしていると、自分が普段いかに何も考えずに生きているかということを思い知って恥ずかしかったし、同時に不思議な気持ちにもとらわれた。長い時間をかけて付き合ってきた友人同士ですら話せないような政治の話、戦争の話、ひと言では片付けられない感情のもつれについて、つい数日前までは日本のあちこちでバラバラに過ごしていた若者同士で、こんなにも真剣に語り合っている。こういう機会はめったにないのだと改めて感じた。そうして語りあう中で見えてきたこと―それは訪中団員として出会った私たちは、日本の若者の中では比較的日中関係に関心のあるほうではあっても、結局のところ、親日知日の人々と断片的な交流してきたにすぎないのだということだった。

もちろん、個人の交流も非常に大事だ。断片的な交流であっても、それがきっかけとなって、のちのち大きな交流へと発展していく可能性も充分にある。しかしただ与えられた機会を消化し、受け身で交流しているだけでは、それ以上先へは進めない。いつの間にか、私はこう考えるようになっていた。北京入りして間もない頃に、某学生団体の代表をつとめる宇佐美さんが、日本での日中交流のイベントの場には日本に関心のある一部の人しか集まらず、その他大勢の中国の人がどのようなことを考えているのか、生で感じられる機会が少ないことが問題だと話していたが、本当にその通りだと思った。今回の訪中では、いままであまり出会うことのなかったタイプの中国の人との出会いがたくさ

んあった。そのひとつひとつが、とても刺激的だった。

北京にいる時、ある中国人のお姉さんと楽しくおしゃべりをする機会があったのだが、私がこれから南京に行くと言うとその笑顔のまま、「じゃあ、南京まで先祖の行いを反省しに行くんだね」と言われた。その言葉はピタッと心の壁面にはりついて、南京についてからも、日本に帰ってきてからも、私の心にいつまでもざらざらとした感触を残した。

その南京では遡ること十日前、十二月十三日の南京大虐殺犠牲者国家追悼日が行われた後、初めて日本から訪れた団体として、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館を見学した。見学を終えてバスに乗り込んでも、皆の表情は硬かった。後部座席の一部で早くも話し合いが始まる中、私はなかなか自分の思いや意見をまとめられずにいた。夜、自分の部屋に戻っても、いろいろな思いが頭の中で渦巻いて眠れなかった。日本にいる時、ひとつのことをこれほどじっくり考えたことは果たしてあっただろうか。

南京から戻った北京では、深夜、皆で多少治安の悪いところへも行った。その帰り、タクシー運転手やキャッチのおじさん集団に囲まれた。彼らは私たちが日本人であることを知ると、ドラマの中でしか聞いたことのないようなものすごい罵詈雑言を浴びせながら、足早に立ち去ろうとする私たちをどこまでもどこまでも追いかけてきた。ようやく乗り込んだタクシーでは、おじいさんが日本兵に殺されたという運転手さんに、開口一番「小日本」と呼ばれ、「民族の恨みは永遠に消えない！」と叫ばれた。タクシーから降りる際には、中国人である人民中国の呉さんが一緒だったにも関わらず、通常料金の倍以上の金額を請求された。

私はしかしこのような個人的な体験の断片のみをピックアップし、単純にこれも中国の一面なのだと思い出として処理するようなことはしたくない。その思いは一緒にいた宇佐美さんも一緒だった。同い年の彼女は非常に快活、アウトプットが得意で頼もしかった。自分なりに咀嚼して、よく考えてからでないと上手く言葉を発することのできない私のことを、どんな時も辛抱強く待ってくれる。その点については彼女の同級生であるMくんについても同様で、帰国後にふたりとゆっくり話をすることができたことを本当にありがたく思っている。

南京で強調される、三十万という失われた命の数。昨年九月には江蘇省の小中高校でそれぞれ南京事件を取り上げた教材が配布され、それに基づいた教育がスタートした。記念館の展示内容は、想像していたよりも公平な立場から語られているものが多いという印象を受けたという友達もいたが、私は正直、まだこの展示をどのように評価したらよいのかわからないでいる。奇しくも私たちが記念館を訪れていた頃、日本の産経新聞では一面と三面を割いての大々的な南京事件特集が組まれていたことを、帰国後に知った。南京事件で三十万もの人が虐殺されたという事実はまったくない、そもそも南京の虐殺そのものが虚構だというのが産経の趣旨だが、私にはその記事が、記念館外の三十万の数字を刻んだ碑と重なって見えた。本当の問題はそこにはない。

記念館を案内してくださった呉さんのおじいさんは南京事件で亡くなっている。M くんのおばあさまの弟さんは、広島の原爆で亡くなっている。しかし呉さんやＭくんは日本やアメリカを怨んでおらず、北京で出会った運転手さんはいまも日本を憎んでいる―。個々人が置かれていた状況も、その後の歩みもそれぞれまったく異なるのだから、そういう結果になるのはしごく当たり前のことなのだ。もう怨んでいないという人もいれば、そうでない人もいる。それなのに日本政府はいつまで過去のこ

とをひきずっているのだと中国を責める。頬を打ったほうは忘れてしまっても、打たれたほうはいつまでも覚えている。打たれた相手の痛みを思いやろうという姿勢を取り続けることで誠意を見せるのが筋だと私は思う。周恩来は日中国交正常化の頃、日本が過去のことを忘れないよと近い、中国がもうそのことは言わなくてもいいよと手を差し出せば日中関係は上手くいくという趣旨の言葉を残した。残念ながらいま、日本の行動は中国には「忘れている」ように見え、そのために中国は「言い続ける」という悪循環にはまってしまっている。この泥沼の状態から抜け出すためには、日本も中国も、数字に固執することなく真摯な態度でこの問題に向き合い、未来につなげていく努力が、残念ながらまだまだ足りないように感じた。いちばん大事なことは、三十万という数字が多いか少ないか、その数字が事実か否かという問題ではないのだから。

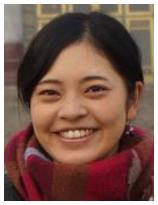
政治や戦争の問題は、非常にデリケートな問題なだけに、人民大学での討論会の際にも、この話題には触れたくないという大学生や院生も結構いた。実際、もっと盛り上がる話題はたくさんあるし、人民大の学生は皆エリートで中国と日本の両方の教育を受けた上で本当にもうこれ以上この話題には踏み込みたくないという人がいるのもよくわかった。南京人のある友達には、「本当にあの記念館に行かなければいけないの？南京はほかにももっと見るところたくさんあるよ」と心配そうな顔で言われた。正直なところ、日本にいる時の私も、嫌がる人もいるなか、話せば話すほど沈んでしまうこのような話題を温かな交流の場でわざわざ取り上げることについてはいささか疑問だった。しかし、ある夜の議論で石丸さんの言葉を聞き、やはりそれではいけないと思うようになった。たとえ一時的に嫌な思いをしても、考え続け、話し合いつづけなければならない問題から、特に私たち学生は逃げてはいけないと思う。

Panda 杯訪中団での七日間―。どんなに勉強不足な部分が多くても、また精神的にどんなにつらいことが起こっても、答えの出ない問題としっかり向き合い、考え続けていこう、目をそむけずに向き合っていこうという思いを強くした旅であった。日中関係はシステムではなく、人で動く。対談の最後でMくんが言った言葉が忘れられない。人民大では、中国人観光客に対するビザの緩和で、一人でも多くの中国人に生の日本を見てもらうことが大事ではないかという提案をしたが、最終的にはやはり人なのだ。帰国後も、初の中国帰国者の会訪問や日中交流団体の活動、中国留学の二次試験・面接など、中国との繋がりは続いていく。今回新しく出会った日中の友達との絆を一層深めつつ、二〇一五年は生活の拠点を中国に置いて日中交流を行い続けていくことを目標とする。

※最期になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった人民中国の方々、そして日本科学協会の方を始めとし、私たちを温かく見守って下さったすべての方々に心より御礼申し上げます。

平原紀子

「歴史認識と民間交流」



今回の旅で一番印象に残っているのは、人民大学の学生との意見交換だ。「歴史認識と国民感情は分けて考えている」という中国の学生の意見に両国関係改善への希望を見いだす一方、「分けて考える」ことで歴史事実が十分に認識されなくなるのではないかという危惧も覚えた。その思いは、南京大虐殺記念館を訪れ、自分の知らない情報に触れることでさらに深まった。最終的に無難な着地点に収まれば、それはそれでよいのかもしれない。

だが、その過程には常に議論と衝突の積み重ねが必要だ。政治的な肩書きのない青年には、お互いに本音を語り、議論を尽くし、衝突を経験することができる。青年一人ひとりに期待される役割とは、その経験を積み重ねることではないだろうか。

人民大学での意見交換は、「日中両国の国民感情の悪化について」というテーマで行われた。グループ構成員は日中各２人の計４人。短い時間ではあったが、現実に国民感情が悪化しているという現状と、その原因に歴史認識の違いやメディアの存在があることはおおむね一致した。その上で、教育レベルを高めてメディアリテラシーを身につけること、個人レベルでの対話を持ち続けること、一人ひとりが一つのメディアとなって発信すること、という未来につながる３つの提言をまとめた。

印象深かったのは、先にも述べたとおり、「歴史認識と国民感情は分けて考えている」という中国の学生の意見だ。正直なところを言えば、こちらとしては非常に助かる意見だ。日本の戦争責任について中国人から問われ、答えに窮した経験は私以外にもあるだろう。実際に戦争を経験していないので、日本の一国民としてどう答えたらいいのか分からないのだ。分けて考えているから民間では仲良くしようというのは、将来目線で収まりのいい話に思える。

「非常に助かる」という思いは、以前訪れた盧溝橋の抗日戦争記念館でも感じた。かつて周恩来総理が日中戦争について、「日本人民は軍国主義の犠牲になった被害者だ」という趣旨の言葉を残したが、この記念館でも、悲惨で残虐な展示の後に、その言葉で結ばれていることで友好的への希望を胸に記念館を後にしたことを覚えている。

しかし今回、「分けて考える」主語が「私たち九〇后（９０年代生まれ）」であることにいささか引っかかった。戦争の記憶が薄れ、分けて考えることに抵抗感がなくなり、歴史事実の認識も薄まってしまうのではないかという危惧だ。

その思いは、南京大虐殺記念館を訪れることで一層深まった。日中間で事実認識に違いはあれども、自分が学んでこなかった事柄が展示内容に多く含まれていた。その一例が、虐殺をあおるような新聞記事だ。日本兵２人による１００人斬り競争、南京陥落時の大々的な勝利の報。アジア太平洋戦争全体では、戦況を有利と位置づけ、国民を鼓舞してきた日本のメディアの責任がよく問われる。しかし、南京大虐殺を当時のメディアがどう伝えてきたか、学んだことはなかった。

歴史認識を原因として日本に対する悪い感情を持つ世代は、実際にこうした虐殺を経験したか、上の世代から直接聞いてきた世代だ。日本側も、日本の責任というものを実感してきた世代だと思う。「九〇后」前後の両国の青年たちには、歴史と感情を分けて考えることは容易かもしれない。しかし、きれいに収めようとするあまり、歴史事実にふたをしてしまうことにならないか心配だ。

今回の初対面かつ短い時間では、衝突にまで至る議論はできなかった。しかし、私たち青年には自由に衝突できる特権がある。戦争世代は高齢化し、証言できる人も徐々に少なくなる。できるだけ先人に学び、理解を深めた上で、現代の青年同士が思いっきり意見をぶつけ合う。「分けて考える」のはそれを経てからでも遅くはないし、それを経て初めて意味を持つのだと思う。

今回の旅の出発前、表彰式の来賓のお一人が「肩肘張らない交流を」とお話された。旅の終盤、中国での表彰式では「知識と経験両方が大事。人の変化はデータに表れない」とのお言葉もいただいた。日中両国の関係改善に向け、青年に期待される役割とは、肩肘張らずに本音で語り、意見をぶつけ合う機会を持ち続けることではないか。７日間の旅で、そう感じた。

自分は日本のメディアの一員として、中国のメディア関係者との意見交換も大変貴重な機会だった。

しかし、メディアの役割や問題点を話し合っていても、最終的には個人の話になる。個人の見方を多面的で充実したものにして初めて、メディアという組織の中でも青年の役割が果たせると思う。人民大学での意見交換では先に述べた３つの提言をしたが、その中でも私は、個人レベルでの対話を持ち続けることを特に重視したい。

倉澤正樹

日中歴史認識問題に対する一日本青年の提言

本論の構成と問題意識

今回の交流事業において、私は歴史認識問題の壁から離れ難かった。現代の日本青年としての日中歴史認識問題に対する向き合い方を考察・提言することが本論の目的である。書いている私自身、決して高みから分析して物申すつもりは決してなく、今も迷いの中にある。

本論の構成は以下の通りである。

序：北京のタクシーで
本論：歴史認識問題を整理するための枠組みの提示
第一節：国家（共同体）による、戦略的・政治的語り（チェスの盤に向かうプレイヤー）
第二節：他者による語りの内在論理の最大尊重の原則とその条件
第三節：負の歴史記念館の在り方に対する問いと提言
小結と提言
終わりに（雑感）

序：北京のタクシーで

Panda 杯訪中交流最終日、2014 年 12 月 27 日深夜午前 2 時頃、我々は北京の三里屯にいた。交流事業の無事を祝し、クラブで見よう見まねの踊りに明け暮れた後、ホテルへ帰るためのタクシーを探していた。その場には今回の訪中交流で我々の世話役を一手に引き受けてくださった人民中国社の呉さん、王さん、私を含めた訪中青年団 8 人がいた。

中国語・中国事情にまだまだ疎い私にはよく分からないのであるが、そこには非正規のタクシー業をしていて、次々と声をかけてくる男の群れがいた。「日本人か？」という質問をされ、「そうだ」と答えると、何やら「日本人」「日本人」としきりに数人の男たちが我々に向かって叫び始めた。その中の一人が、呉さんに執拗に絡んできた。「お前はそれでも中国人か？ああっ！」と何度も叫び、いくら振り払ってもついてきた。なんとか逃げ切った後、呉さんに事情をお尋ねすると呉さんは、彼らのタクシーの利用を断ったため、日本人を連れている呉さんに言いがかりをつけてきた、と語られた上で、「まぁ、理不尽な奴らだ。中国人はみんながああではありません。一部の奴らですよ。」と苦笑なさった。私も苦笑し、内心、道端で「お前日本人か？」と絡んでくる中国人の中に、真面目な人はいないだろう、とこの時点では本当に軽く考えていた。

正規のタクシーを呼び止めて、呉さん・私・桜井さん（私と同じ、パンダ杯訪中青年団の一人）の三人が乗り込んだ。50 歳そこそこの北京語を話す男性運転手さんは不意に助手席の私に、「小日本か？」

と聞いてきた。何やら気が立っている様子である。私はやや興奮していたので、揶揄して「そうだ、私は小日本人だ。大日本人ではない。」と答えた。呉さんは、「倉澤さん、止めた方がいい。」と忠告してくださり、しばらく沈黙が続いた。その後私が知れた限りの対話の概略は、ほぼ以下の通りである。

運転手：「たとえ、日本の首相が私の隣に座って客となっても、私はぜんぜん光栄とは思えない。」
呉さん：「どうして日本人が嫌いなのか？」
運転手：「私のおじいさんが日本人に殺された。‥‥‥（略）日本人は反省していない。謝罪したとしても、そこに誠意はない。釣魚島・靖国神社問題もその表れだ。民族の恨みは永久に解けない。私は日本人を信じない！」

私は口を開こうにも開けなかった。話の重さを前にして、日本人の若者である私が、「お気持ちは分かります。」とは言えない。「日本人を代表して、本当に申し訳なく思います。」と謝罪する感覚は、正直私には分からない。強制される形で、コピー・アンド・ペーストされたような外交官のセリフを吐けば良いのだろうか。運転手さんの日本人に対する気持ちは理解でき、十分に尊重されるべきと思うが、不意に突きつけられたこの非難を、私自身の問題として受け止めることは、できなかった。もし私が中国語に堪能であれば、「お話を伺っていて、本当に心苦しく思います。後世に生きる日本人の一青年として、日中友好の未来のためにも、真剣に受け止めたいです。」と言えたかも知れない。最後に私が、「おじさん、全ての日本人が本当に悪人である、というわけではありませんよ。」と話すと、運転手は「分かっている。」と、やや和らいだ表情で答えた（蛇足ながら、この時のタクシーの価格は 80 元。他のタクシーで同じ場所から同じ場所へと走った例を 3 例聞いたところ、いずれも 40 元前後であった。どうやらわざと遠回りされたようだ）。

以上が、今回の旅行において最も印象的だった「交流」の一コマであった（断っておきたいが、その他の交流は全て穏やかなものであった）。能天気な大学生の理解を超えた、市井の生の声。私は頭と心がぐるぐるし、同乗していた桜井さん、そして平原さん（同じく、パンダ杯訪中青年団の一人）ら居合わせた日本人青年に意見を求めた。

私：「桜井さん、どう感じましたか。」
桜井さん：「うーん、運転手さんの気持ちは分かるけど、本当に大切なことは話せなかったんじゃないかな。」
私：「桜井さんにとって、本当に大切なこととは、何ですか。」
桜井さん：「例えば、私の曽祖父も太平洋戦争で殺されている。戦争において、純然たる被害者・加害者は、いないのではないか‥‥‥。ある場面での“被害者”も、別の場面では“加害者”ではないか‥‥‥？」
私：「たぶん、そうかも知れない。しかし、当事者にしてみれば、自分こそ“被害者”であり、あちらは“加害者”、という構図から抜けられないよね。」
平原さん：「例えば沖縄は、本土との関係で見たら“被害者”だけど、琉球王朝にも他の小島を支配した“加害者”としての歴史もあるみたい。けど、そういう側面は太平洋戦争での 94000 人の死者数という圧倒的数字の前に、忘れ去られる。『本土人に分かってたまるか！』の言葉の前には、本土人たる我々は、沈黙を余儀なくされてしまう。」
私：「だから、数が重要。数が多ければ自らの“被害者”としての立場を明示的に強調でき、自らの

加害者性は相対的に薄れる。南京大虐殺記念館での“300000”という数を強調するモニュメントの意味。」

結局、私はその場で「要するに、『被害者』の立場を取ろうとする戦略論だろう」という安直な結論しか出せなかった。一体、我々はどう向き合うべきなのだろうか？桜井さんの考えは、国家間の戦争において、人は人をどれほど殺したくなくても殺さなくてはならないとぎりぎりに追い詰められる点で、被害者・加害者はない、と仰りたかったのだと思う。しかし中国の方々にとって、まずは「国」として、「日本」が「中国」を侵略し、そこで虐殺したということを認め、「日本人」として謝罪の姿勢を示した後に始まる対話であり、この優先順位は絶対に揺らがない、と感じられることも多いだろう。この問題を考える上で、少し迂回してみたい。帰国後に私が還暦過ぎの中国語の先生から伺ったお話をお聞きください。

我々が学生だった頃、日本軍によって家族を殺された中国人の話はざらだった。私の中国人の先生は、家族全員を日本兵に殺されたが、彼女は我々を前にして、ついに一言もその話をしなかった。私は彼女が書いた本の中で、その体験を知ったのだ。彼女はそのことを我々に十分言う資格があったが、決して言わなかった。その沈黙の意味を考えないといけない。彼女だけではない。あの時の中国人で、我々にそうした話を自分からする中国人の話は、聞いたことがない。言われた相手は沈黙するしかない。そういう沈黙を強いるのが、心苦しかったのだと思う。言われる側の気持ちを、十分に汲んでくれていた。そして、日中友好の未来を壊してはならない、と自分の思いを譲ったのではないか。周恩来は日本人民も中国人民と同じ戦争被害者、あの戦争は一部の軍部のトップのせい、という形にしてくれたのだ。そうして、肩身の狭い我々を救ってくれたのだ。そして、あの頃訪中した我々に対し、中国人は自分たちの言語・文化を学ぶ日本人として大いに歓迎してくれた記憶がある。私たちぐらいの世代で、時々見かける熱烈な日中友好論者は、そういう体験の中で、中国人の懐の深さに打たれたのだと思う。

南京で中国人を「虐殺」してしまった旧日本軍兵士で、南京で土下座して謝った人がいたが、その時代の中国人は彼を高く評価した。彼としてはどうしても中国人に対して済まないという気持ちがあったのだと思う。

今の安倍首相は、なるべく謝りたくない人なのね。そして、習近平、あの人は一体何なのか（筆者注：2014 年 11 月）。仏頂面したりして。あそこで周恩来なら、心の中ではどれだけ憎かろうと、絶対に笑顔で握手した。習近平にとっては、日中友好や人民のためなんかより、自分の権力を守ることの方が重要なんじゃないか。今の戦争を経験してない世代の中国人が「謝罪しろ」と言ったって、日本人は「どうせ金が欲しいんでしょ」と思ってしまう。そこでなされる謝罪の意味って、何なの？反日暴動を起こす若者を見ていると、あれだけ血を流し、涙を呑んで先人が築いた新中国の重さはどこへ行ってしまったのか、と思う。

日本人によって家族を殺された中国人がざらにいて、そうした中「日中友好」を必死に掴み取ろうとした時代があった。戦後まもなく 70 年の時代を生きる一青年の私が、歴史問題について如何に真剣に考えたとしても、その真剣さは先生の世代には到底及ばない。現代の日中関係を見てきた私にとっては、「国際政治に信義なし、あるのは戦略的外交論のみ」と堅く信じ、周恩来についてさえ、冷戦

という国際環境下での戦略のために、問題の所在を棚上げにして済ませてしまった、という冷ややかな眼で見ていた。現在、日中双方の世論は殺伐化し、日本政府やメディア界の責任ある人物が、うっかり「謝罪する」と言えば、中国政府側からはどんな要求を突きつけられるか分からず、日本のメディア・ネット空間などからは、言葉尻を捕らえられて「売国奴」の悪罵を浴びせられかねない。誠に遺憾ながら、現在の日本社会においては隣国の信義も自国の信義も信じられず、広義の言論の自由も閉塞しつつあるのではないか、というのが私のいささか悲観的に過ぎる個人的認識である。戦争責任について周恩来の語った、「中国側は言わない、日本側は憶えている」という紳士協定的沈黙原則は、もはや荒波に沈んでしまった。先人の思いを背負いつつも、現代に生きる私としては、私の立場で歴史問題に向き合おうと思う。以下で、歴史認識問題に関する私の立場を述べたい。

本論：歴史認識問題を整理するための枠組みの提示

相手の論理に如何に向き合うかを考える上で、以下の二通りの基本的な立場があるとする。1 に外在論理、2 に内在論理である。外在論理とは、語り手の論理とは無関係に、語り手の外に存する論理であり、内在論理とは、語り手の内に存する論理、である。歴史認識問題に向かう上では、異なる 2 つの論理の語りと、その使い分けが必要であると考える。

一、国家（共同体）による、戦略的・政治的語り（＝外在論理）の応酬

二、他者による語りの当事者性（＝内在論理）を聞き手は最大限に尊重すべきという原則

以上、一と二のそれぞれについて考えを述べたい。

第一節：国家（共同体）による、戦略的・政治的語り（チェスの盤に向かうプレイヤー）

本節は国際政治学の古典、E．H．カー著『危機の二十年』（岩波文庫、原彬久訳、2011）に基本的認識を負っている。国際政治において、決定的に重要な要因はパワー（力）である。しかし、「力こそ正義」は人々にとって、あまりに直視に耐えない不都合な事実である。結果、道義によるパワーの装いが、必要不可欠なるものとして要請される。政治の場において、道義はパワーによる基盤があってこそ初めて意義を有し、道義のみでは何らの現実的実効性も持たないものとされる。歴史上の戦争を事例に考えてみよう。1945 年８月９日に開始されたソ連の対日戦争に伴う民間人のシベリア抑留はなぜ、人道に対する罪に当たらないのか。さらに言えば、不戦条約や第二次大戦直後の戦争裁判において示された平和原則などに従えば、冷戦以降の全ての戦争には戦犯がいて、善悪に則って裁きが下らねばならないはずだが、戦後世界史はそうはならなかった。朝鮮戦争・ベトナム戦争・アフガン戦争・湾岸戦争・イラク戦争などにおいて、戦犯裁判は行われたであろうか。そもそもそのような動議さえ起こらなかったことこそ、重要である。

全ての政府は、開戦前においては、自国の外交交渉における忍耐や平和への願望を強調し、それを理解しない相手国を非難する。ヒトラーの演説・日米開戦の詔勅・全ての連合国の宣戦文章は、どれも判で押したようなものである。戦争後においては、如何に相手国が残虐であったかを戦略的に強調する。E．H．カーは語る。

> 敵国ないし潜在敵国の信用を落とすためにつくられた理論は、目的をもつ思想の最もありふれた形の一つである。自分の敵ないし将来自分の犠牲になるかもしれないものを、神の目からみれば劣

った存在であると触れ回ることは、このカテゴリーに入る。なぜなら、ある国民または階級が他の国民または階級を支配することは、つねに被支配者の知的・道義的劣等性を信ずることによって正当化されるからである。･･･残酷物語は戦争が生んだありふれた産物であるが、そのなかでも性的な性格を帯びた非行は、ひときわ目立つものである（『危機の二十年』p150）。

南京大虐殺記念館では日本軍の「比類なき残虐性」「異常性」「レイプ」が主張される。日韓の従軍慰安婦問題、沖縄基地問題での米軍による「レイプ」問題が大きく政治問題化される。このような場でのレトリックは、もはや個人の当事者性や善悪是非の判断を置き去りにした「政治」である。国家は特定のチェス盤を前にするプレイヤーであり、立場を入れ替えれば同じ選択をする、と想定されている。歴史を勉強し、国家の外交ゲームに慣れ、自国及び他国の政府が操る歴史認識タクティクスに対し、透徹した戦略思考を持つことが、若者の歴史認識にとって重要であると私は考える。さもなければ、人民日報の「日本における軍国主義復活」の活字に憤り、反動として日本で繰り返し再生産される偏った右翼主義的主張に傾きかねない。要するに自国・外国双方に対する冷めたマインドが必要である（ここで附言しておきたいことは、透徹した戦略思考という名の下に、上記のような虐殺・レイプの歴史的事実を過少化しようという意図は私には全くない。この思考はむしろ、いわゆる歴史修正主義と対決する思考様式である。透徹した戦略思考によってこそ、歴史を修正しようとする欲望がいかなる構造のもとに生み出され、表現されるかということを、を適切に見抜くことができるはずである）。

こうした国家の操る歴史認識を看破するために重要な武器が、人文科学としての歴史学である。ここでは歴史に対する「評価」と「事実」が峻別され、「評価」に先立って「事実」が研究対象に掛けられ、普遍的・客観的立場が到達すべき地平として想定される。「善」「悪」を論ずる前に、事実の追究を目的とした人文科学としての歴史学を我々は謙虚に学ぶべきと考える（「歴史」事実それ自体には善も悪もなく、「評価」が入って後に初めて「善」「悪」が定立するという考え方はあくまで私の歴史観である。まず、「歴史とは何か」というレベルの検討から始めることが必要かも知れない）。

第二節：他者による語りの内在論理の最大尊重の原則とその条件

第一節で示した政治的語りは、どの政府も合理的・戦略的選択の結果、立場を換えれば同じ振る舞いをするという前提認識のもと、客観的歴史法則という外在論理に基づいた分析である。これから示す内在論理の傾聴とは、相手の個を最大限に掬い取り、そこに当事者性を存しようとする姿勢のことである。

実際には当事者としての語りも、第一節の政治的語りと無意識のうちに混じることは免れない。北京で会ったタクシー運転手は、おじいさんが殺されたという個人レベルの語りと、民族の恨み・尖閣靖国問題という政治的なレベルの語りがパッケージ化されている。南京大虐殺記念館の展示は、虐殺された代替不可能・数量還元不可能な個々人の虐殺の記憶や証言の展示と、「300000」という数字のモニュメント・「勿忘国恥,円夢中華」の立札という数量化・政治化された民族・国家の記号的語りがパッケージ化されている。もし、語りの種類が政治面だけなら、私は何の感情も交えず、政治問題として国際法・国際政治などの分野から借りてきた外在的知識・論理によって応酬することができる。ここに本来的には代替不可能な個の惨劇の話が混じると、聞き手は沈黙を強いられる。聞き手として

は、「この沈黙に乗じて、政治的要求を呑ませようとする手か、そうは一杯食わされないぞ」、と警戒してしまう。結果、厳かに傾聴すべき惨劇の語りが、E．H．カーが指摘したように、道義の装いを凝らした戦略対話の次元に回収され、「認める・認めない」の騒々しいケンカに堕してしまう。

チェスのプレイヤーの如き戦略論と、代替不可能なる当事者による消え入りそうな語り。聞き手としては、相手の政治色次第で、外在論理・内在論理双方を時に織り交ぜつつ、その状況に適う最も適切な仕方で応答せねばならない。外在論理だけでは当事者の痛みは置き去りにされ（サンフランシスコ講和条約・70 年代の日中友好条約は、冷戦構造の中での戦略的必要が優先された結果、慰謝は後回しになってしまい、そのツケに悩まされているのが現代の日中関係、と私は思う）、内在論理だけでは政治に対してあまりに無防備であり、偏った思想に取り込まれてしまう危険性さえある。

第三節：負の歴史記念館の在り方に対する問いと提言

南京大虐殺記念館に対し、私は敢えて現代日本人青年として、問いと提言を発したい。冒頭で桜井さんが問いを発したように、戦争に純然たる被害者・加害者はあるのだろうか。殺したくて殺す兵士がいるのだろうか。先日母から、中学校時代の初老の先生が語ったという話を聞いた。この先生は授業中、自分は本当に不本意ながらも中国で人を殺してしまい、今でも苦しみ続けていることを、母たち生徒の前で涙ながら語ったという。この先生は「戦争だったから」「敵兵だったから」などと言わず、「人を殺した」という言葉を使った。自らの責任として引き受けたのである。無理やり殺さざるを得ない立場に立たされ、ついに自らの手を鮮血に染め、生涯自責の念に苦しんだ無数の兵士もいたであろう。かつて周恩来ら中国人が日本人の体面を立ててくれたのは、こういう日本人の無言の自責の念の深さを汲んでくれていたところがあったのではないか。一方、南京大虐殺記念館の展示は、率直に言ってしまうと、「日本兵の異常な残虐性」「悪魔」といった非人間性の強調に重点が置かれていたように私は感じた。

外在論理に基づく語りは、それが如何に想像を絶するような悲惨な内容であれ、抵抗なく語ることができる。一方、あまりに強烈で悲惨な直接体験（＝トラウマ）は、語ることが難しく、いつでもどこでも同じように語れるものでは決してない。そのような消え入りそうな語りであるからこそ、我々は国籍や自分の立場とは関係なく、自ら進んで沈黙して頭を垂れ、心を澄まして必死に聴こうとする。そして、「これは聞かなくてはならない」という自主的衝動が湧き起る土壌としては、騒々しいスピーカーのような政治言説空間から離れた場所が選ばれねばならない。悲惨な体験の記念館は、政治と一定の距離を取ることで、その尊厳を高め、長期的には発信力を高めるという逆説的真理がある（アウシュヴィッツ・ヒロシマの世界文化遺産登録。日帝時代の惨劇を伝える韓国の西大門刑務所も、世界文化遺産登録を目指している）。反対に政治に近づけば普遍価値としての尊厳を失う。ヒロシマが世界文化遺産登録され、靖国神社が登録され得ないことは、日本人の私にとっても当然のことと認識している。そのヒロシマでさえ、世界史上初の原爆投下地として、1955 年に第一回原水爆禁止世界大会が開かれた当初には、幅広い国民の真摯な支持を集めることができたが、1961 年ソ連の核実験再開に対して、日本共産党がソ連の核を認める一方、アメリカの核には反対する、というダブル・スタンダードを採ったことで政治闘争が持ち込まれ、その尊厳性を堕落させた。犠牲者の露骨な政治利用は、長期的に見るとその発信力の低下を招き、戦略的観点から見ても得策ではない。

私の願う南京大虐殺記念館の展示が採るべき道は以下の通りである。政治色を脱し、異常なる残虐

性というメッセージを中和して普遍性を持たせることによって、負の世界文化遺産登録に向かう。記念館は尊厳を高め、半永久的に記憶さるべき人類全体の共有財産となる。そこでは、日本人も含めた世界中の平和を願う真摯な巡礼者が集い、共に黙祷を捧げ、新たな決心を宿す。結果、中国が更に世界に開かれた国となり、鷹揚な文化大国として認められていく。記念館が政治と一線を画すことで、長期的には潜在的な政治的発信力も高める。このような将来像を「中国の夢」と捉える中国人が要職を占めれば、中国は地域大国から世界の責任ある大国へと向かえるのではないか。「勿忘国恥,円夢中華」の後半四字をより完全な形で実現するためには、冒頭四字を改めねばなるまい。私は南京大虐殺記念館の世界文化遺産登録を強く支持したい。

小結と提言

透徹した戦略思考の語りと、犠牲者の厳粛な語り。そして、両者は意識的・無意識的にパッケージ化されるため、両方の語りを併せ持ち、使い分けることを提言した。

敢えて理想論を語れば、犠牲者側が赦し、加害者側がその血と涙の無念を汲み取る、という周恩来が提唱した在り方が望ましい。70 年代 80 年代の日中関係がなぜ可能だったかというと、語るにはあまりに重い直接経験を背負った世代が指導者層に就いていたためではないか。我々の世代はすでに直接経験からそれを如何に伝承していくかという時代へと移行している。このような問題意識に立った上で、負の記憶の記念館の在り方に対して提言をしたい。負の記念館は、政治と距離を取った上で、消え去るような犠牲者の微かな呻き声を、参観者の側がなんとか聞き取ろうという衝動を自然に起こす、普遍的な価値を持つ開かれた施設であることが望ましい。ここには未来志向・普遍化の力学が働いている。

以上、国民の歴史認識への向かい方、負の記念館の在り方について、2 つの提言をした。ただし、日本という固有名詞を外して普遍価値に向かうという決断は、共産党政権にとって難しいだろう。また、「加害者」たる日本の側からこうした提言をすることは「盗人猛々しい」と受け取られかねない。

前向きで率直な議論を交わすためにも、日本政府は国家として痛切な反省と謝罪、という村山談話以来のメッセージを安易に下ろしてならない、と強く思う。

終わりに（雑感）

交流は難しい。気負いすぎると、ついついカリカリして角が立つ。遠慮しすぎると、踏み込んだ話ができず、どこか物足りない。まずは自己の主張を置いて、相手の見解に耳を傾け、理解するという基本は、私にとって何度確認しても足りない。

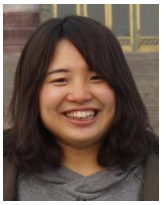
日本国内の言論界には、静かな危機が進行しつつあるかも知れない。書店では中国崩壊論・脅威論が並ぶ。中国の書店（2014 年 12 月 21 日西単の「大厦書店」）では日本脅威論・崩壊論に類するタイトルの本は一冊も見受けられず、拍子抜けしてしまった。新聞では、左翼の良識的旗頭たるべき朝日新聞は信用を失墜させ、読売新聞は米国＝友・中国＝敵、という単純化された構図を作る。週刊誌では『中国共産党に国を売った朝日新聞 7 人の戦犯』（週刊文春 平成 26 年 9 月 18 日号 購入誌面（P32-36））のように、「火付け役」「売国」「戦犯」と言った概念が語られ、2ch に代表されるネットは言うまでもない。巷ではヘイトスピーチが叫ばれ、日本外交の将来について長期的国益を考慮しないで暴走する石原慎太郎のような政治家が存在感を振う。私がここで言いたいのは、議論の相手を

軽蔑し、一方的にその存在までも消し去ろうとする声高な主張が跋扈し、戦後日本で培われてきた良き言論界の土台が蝕まれつつある、ということだ。このような言論ムードにおいて、犠牲者への真摯な追悼の念はますます遠ざけられている。

今回の交流事業のために、非常に大勢の方々が情熱を持って企画し、準備し、奔走した上で、我々日本青年を心暖かくもてなしてくださった。その思いを忘れまい。謝謝。

難波千穂美

PANDA 杯中国招待旅行に参加して



この一週間を私は決して忘れることはないと思う。

あっという間だったが、本当に濃い一週間であった。

中国に行ったことはあったし、行く予定となっている有名な観光地もほとんどが行ったことのある場所であった。この仲間に出会う前まで、私は正直なところ遊びのつもりだった。

ただ、東京で誓った、「中国人の方の心に温かい記憶を残せるように、頑張ってくる」といった言葉を胸に日本を発った。

特に記憶に残ったのは、中国人学生との討論会、南京大虐殺資料館、そしてこのメンバーでお酒を飲みながら語り合ったことだ。

旅行２日目、出会ったばかりの中国人学生と本音で語り合った。今までこのような機会はなかった。いつもなら避けていたであろう話題について想いを語り、そして新しい視点からの考えを聞き、視野が広がった。しかし同時に自国の歴史について、そして両国の歴史についてもっと知識があれば、より深い話合いになったであろうと後悔もした。同じ班になった中国人学生が、もともと日本語を勉強するつもりではなかったが、偶然日本語を学ぶことになって、それから日本を知って、好きになった。といった。私もそうだ。もともとは強い思いがあって中国語を選んだわけではなかったし、中国を知るまでは、メディアに踊らされていたひとりであったことを思い出した。改めて、無知の怖さ、知ることの大切さを感じた。

もうひとつ感じたのは、討論会が終われば漫画やアニメの話をして、流行の話をして、本当になんの変わりもない学生同士のたわいもない世間話だったことだ。もちろんこれは留学時代にも感じたことだったが、討論会で固い話をした後だったからなおさらそう感じた。国籍など気にさせしなければ、いい意味でみんな同じだ。性格や見た目や考え方が違うのは当たりまえのことで、自分と気が合う人がどんな人かなど、国は決して関係ない。色眼鏡を外しさえすれば、人間同士の温かいつながりがうまれる。

この日の夜、タクシーに乗った際、いきなり運転手さんが「日本人は嫌いなんだ。」といった。どうして？と聞くと、ここに住んでいる人は、みんな日本人が嫌いだと、答えにならない答えが返ってきた。ショックだったが、またか。とも思った。留学中何度も聞いた。でもどこかで、よし、チャンスだ。とも思った。

私は、「自分たちは、中国が好きで来たんだ。もっと知りたいと思っている。日中友好のために、作文を書いたメンバーがきたんだ。」と、正しいのかもわからない、中国語でおじさんに話かけた。どこ

まで、言葉が伝わったのかわからない。祈るような気持だった。
でもきっと、気持ちは伝わったのだろう。おじさんの顔が優しくなった。北京はどこへ旅行にいったのか。どこがおすすめか。どんな食べ物がおいしいのか。多くのことを教えてくれた。時間は１０分くらいだっただろうか。ホテルにつき、おじいさんに「出会えてよかったよ、またね」と手を差し出したら、「またね」と手を握り返してくれた。
中国人の方の心に温かい記憶を残すという目標を、少しだけかなえられた気がしてとてもうれしかった。

南京大虐殺記念館は２回目だった。初めて行ったときの記憶は、ただ衝撃と暗い気持ちの記憶しか残っていなかった。だから、このツアーに行く前日程表にこの場が入っていたのを見て、あぁまたこの場所に行くのか・・・と思ってしまった。しかし、このツアーが始まり、一緒に行ったメンバーの熱い気持ちと知識の豊富さ考えの深さを目の当たりにして、私も軽い気持ちではいけないと感じた。なにかを感じ取って、学んで帰りたいという気持ちで、記念館へ入った。

一番に感じたことは、日本人の歴史認識の薄さだった。果たして日本人はどれだけの人がこの事件のことを、この過去を、知っているだろうか。記念館には小さな子どもが親に連れられてきている姿をよく目にした。その姿は、日本で原爆資料館に行ったときにみたものに似ていると思った。この記念館ができたのもきっと過去を繰り返さないために、語り継いでいく必要性があるという気持ちからだろう。記念館に来た子どもたちは、この衝撃的な過去を学び大人になりそして、また子どもに語り継いでいく。

この衝撃的な過去を学んだ子どもたちは、学校でも日中間の歴史を詳しく学び、テレビでも日本の報道を目にする。一方で日本はどうだろうか。この事件のみならず、日中の歴史を深くまで学ぶ人は、少数派のように思う。南京大虐殺事件において、日本では事件の内容ではなく、死傷者の人数について、意見している。もっと人数は少ないはずだ。と。その報道を見た日本人は、口をそろえて、そうだ、そうだ。という。この状況を、あの記念館にいた子供たちが知ったらどう思うだろうか。逆の考え方をしてみても良い。もしも、アメリカ人があの原爆のあった歴史について今の日本の中国に対する態度をとっていたら、決して気分の良いものではない。

謝罪をした、していない。という問題もあるが、人数よりも、謝罪の問題よりも、まずは、この歴史事実を日本人は知っておくべきことだと感じた。もちろん、自分も例外ではない。
歴史は苦手だった。苦手を理由に、まじめに学ばなかったことを今とても後悔している。今からでも少しずつ勉強していこうと決めた。また、歴史には国によっても人によっても認識の違いがある。さまざまな角度から歴史を学ぶことも大切だと感じた。

このツアーが終わるころ、これは本当に自分の人生をも変えるツアーだったと心から思った。一番自分を変えたのは、もしかするとこのメンバーに出逢え、このメンバーで、このツアーに参加できたことかもしれない。それぞれが歩んできた道のなかで、それぞれの日中関係への想いがあって、その想いをぶつけあいながら、迷いながら楽しみながら過ごした一週間。自分の無知さを何度も後悔し、恥ずかしく思った。議論に熱が入る姿を、レベルの高さに圧倒されながら、話している内容を理解するのに必死だった。自分の、明らかに話についていけてないレベルの意見を優しく聞いてくれ、どんな意見も大切にしてくれたメンバー。もっと本を読んで、もっと歴史を勉強して、いつかまたこのメンバーで語り合いたい。

このツアーで、スタッフの皆様、現地の学生の方々がとても温かく迎えてくださり、中国のおもてなしの温かさを本当に心から感じた。

このツアーに参加するまで、日中関係は、目の前の人の気持ちを変えること、それさえできれば改善していくと思っていた。でも大切なのは、それだけではないと知った。そこで築けた友好をどう今後につなげ、どう生かしていくか。継続の大切さに気づかされた。

また、この経験を伝えていくこと、自分の想いを発信していくことも、日中をつなぐ橋の一部になる。

貴重な経験をさせていただいた１週間。私の人生に、深く深く刻み込まれた。

石丸 大輝

パンダ杯招待旅行感想文

第１回パンダ杯招待旅行は、2014 年 12 月 20 日から 26 日の日程で、北京市、江蘇省南京市を訪問した。私は感想文として、この旅行で得た成果やパンダ杯の意義、今後の運営に向けてのフィードバックについて触れていきたい。

私はパンダ杯の優秀賞を頂いた際、誠に光栄で嬉しい反面、私のような「中国通」がこのような旅行の機会を奪ってしまってよいのかと非常に申し訳なく思っていた。私の訪中歴は、学生にしては相当なものかもしれない。初めて訪れたのは４年前の冬。その後３度続けて旅行で訪れ、外務省の主催する大学生訪中団（Jenesys プログラム）や内閣府主催の日中青年親善交流事業の参加青年に選ばれたこともあり、極めつけは北京への２年間の留学だ。中国首都空港の「友あり、遠方より来たる」のゲートをくぐったのは、今回で実に十何度目かであったのだ。

そんな私に期待されていることは、パンダ杯運営側が想定しているような「中国を知ってもらう」といったことよりも、私の知っている中国を他の参加者に伝え、また巡り合う中国人の方により深く日本を知ってもらうようにするといったことだったといえよう。さらに、我々と交流してくれた中国人学生の大半が日本語学部の出身であったことから、日本語を研鑽したいであろう彼らの気持ちに配慮して、私はなるべく中国語を使わないでいた。参加者の中で二番目の年長者であったことも相まって、ますます世話役のような気分になった。（もちろんそれが嫌だというわけではない。）自由行動の時間には留学時代の友人と会って、存分にハッスルしていたが、旅行の行程中、とりわけ住み慣れた北京にいた間のじれったさといったら筆舌しがたい。

実は、参加者の多くは私同様に中国となじみの深い人たちであったことからも、行き先は改善の余地があるかもしれない。特に観光で既に訪れていた人が多い北京では、なかなか行きづらい郊外の名所（周口店など）や、スラム・貧困地域などを選んでみてもよいのではないだろうか。これと関連して、学生との交流に関しても提言させて頂くと、日本語が話せない学生がもっといてもよかったと思う。日本語学部生の語学能力は確かに高いが、きちんと伝わっているのか疑わしいときもあり、中国語や英語も用いて話し合う必要もやはりあった。それならば、語学専攻のみならず政治や経済といった他の専門分野を極めた学生たちも交ぜて話し合えば、さらに有意義な交流ができたに違いない。

好奇心がくすぐられる体験といえば、学生との交流よりも、人民中国雑誌社の方々との交流のほうがはるかに素晴らしかった。「今の日本は、中国なら決して主流になれない過激な意見が書店のベストセラーに並び、歪曲した自由主義が体現されている。日本は山月記でいう虎になりつつある」と本気

で心配する王衆一編集長のお話は、いずれも興味深く、私の心に響いた。また王編集長が連れてきてくださった専門家の方々の意見は本当に目からうろこのものばかりで、これまで中国で味わったことのない興奮を覚えた。彼らが政治関係など敏感な話題にも多く触れられていたことに非常に驚き、私自身も忌憚なく意見をぶつけることができた。政府間の交流事業であれば、ここまで深く切り込んだお話を聞くことは決してできなかったと確信している。

その王編集長が「別に今回の招待旅行は中国となじみの深い方ばかりでもかまわないんです。毎回必ず何か新しい発見があるはずなので。」と仰っていたのが、私にとって大きな励みとなった。パンダ杯招待旅行が見せてくれた中国、それは人民中国エリート記者たちの顔。よもすれば中国の御用機関の手先と思われていても不思議ではない大物ジャーナリストたちが、国の公式見解やプロパガンダを巧みに語る人や、ナショナリズムを過剰に刺激するか逆に「友好」をむやみに唱えるだけで本質を見誤った人たちばかりではない、ということをこの目でしかと確認できたことは、私にとって大きな収穫だった。

また、パンダ杯招待旅行ならではといえるもう一つの特色は、日本人参加者同士の交流が実にしっかりしていたことである。読書家の倉澤さんや記者の平原さんのように自分の意見がきっちりとした参加者に多く恵まれたおかげで、夜も部屋で議論が活発になされた。こういう初対面の人々同士の交流では、飲んで盛り上がって遊ぶことしか知らなかった私にとって、今回、毎晩参加者全員で真面目に延々と語らい続けたのは、大変新鮮な経験だった。これだけ読むと面白みに欠けた仲間だったのではと思われるかもしれないが、個性豊かな参加者の皆（特に倉澤さんの変人ぶり）は本当に愉快で、私はこのパンダ杯で繋がったコミュニティをずっと大事にしたいと心から思っている。今後も同窓会などを開いていきたい。

今回のパンダ杯招待旅行は、私にとって非常に有意義な 1 週間であった。学生のみならず社会人の方々とも深く交流できたのが特に良かったし、日本人参加者もさすが作文コンクールの入賞者たちとでもいうべき魅力にあふれる方ばかりであった。中国への深い知見や体験がしばしば評価されて選ばれる入賞者の「招待旅行」として、単純な観光や交流に終始せず、むしろ日ごろ目にすることのできない、よりコアな中国をさらに見聞きすることができれば、ますます素敵なものになっていくに違いない。パンダ杯一期生として今回参加できたことを心より誇りに思う。今後もパンダ杯の益々の発展を願い、またそのためには協力も惜しまない所存である。最後に、事業の運営に携わって下さった人民中国雑誌社、日本科学協会をはじめとする関係者の方々に最大の感謝の意を表して、我が感想文の結びとしたい。本当にありがとうございました！！

池部菜々子

中国の旅を終えて～北京の青空と私の決意～

「北京は何色なの？」私の感想文を読んでくれた仲間が私に聞いた。しばらく考えた私は「青色」と答えた。その時は深い理由はなく心に浮かんだ色を答えた。しかし後から考えてみるとその青色は“青空”の色だったのかもしれない。私が訪れた時の北京は澄み渡る青空が多かったからだ。今回の訪中も天気に恵まれ青空の北京を満喫した。

7 日間で様々な場所を訪れ、たくさんの人と出会った。その中でも特に印象的だったのは中国人民

大学の学生とのディスカッションだ。私の中で何となく触れてはいけないような気がしていた「日中両国における国民感情の悪化について」本音で話せる場は非常に貴重だった。日本人２人、中国人２人の４人のグループで話し合い、最後は各班の代表者がまとめを全員の前で発表した。まず私が中国人学生と話す上で感じたことは彼らの心の中の日本は眩しいくらいに色彩を放っていたことだ。私以上に日本を知っていてそして愛していた。日本のことを知りたくて話題から脱線してまで今の日本の文化や国民性の違いなどの質問を次々とぶつけてきた。自分の国を好いてくれる嬉しさはもちろんだが、自国に対する知識のなさを恥ずかしく思ったのも事実だ。

そんな中、まず日中両国の国民感情について私たちは悪化してしまった原因について大きく分けて３つ挙げた。まずはメディアによる報道である。日本では視聴率を取るために中国のマイナス面ばかりを誇張して報道していて、中国では日本軍兵士たちが次々と倒れていくような映画が好まれる世代があることが分かった。２つ目は教育方法の違いについてだ。かつて両国が戦争をしていた事実は変えることはできないがその事実を子供たちに伝える方法があまりに違いすぎていることが分かった。日本ではなぜ戦争は起こってしまったのかという背景も含めて学んでいるが、中国では１つの事件をより詳しく説明することに重きが置かれている。この違いが大人になった時に相手国を見る上での前提となっていたのだ。そして最後は中国人が日本に来ることが非常に難しいということだ。何種類もの書類を書き、とても面倒な手続きをしなければ日本へ入国することができない。このことで日本は自ら中国人を遠ざけてしまっているとも言えるのではないかと考えた。

これらのことを踏まえて私たちは改善に向けての提案を２つした。１つ目はお互いの考えが変わるような大きなアクションが起これば良いのではないかということだ。しかしこのことはかなり受身な考え方になってしまうので、もうひとつは民間レベルでの交流を深めて１人でも多くの人へ良い影響を与えることであると考えた。後者は私自身も強く思っていることであり、メディアからの情報で真っ黒に染まった日本人の心の中国に色を付け続けることを今後も続けたいと思っている。

今回のディスカッションを通して自分の考えを改めて確認すると同時に日中両国の若者がどのように考えているかを知ることができた。そしてこの時から私はある言葉を意識するようになった。それは一緒に訪中したメンバーの一人が言っていた「人間だから好き嫌いがあってあたりまえ。だから中国が嫌いだという日本人できちんとした理由があるのならそれは納得せざるを得ない。だけど、無関心や無知から何となく嫌いになることが最も恐れるべきことだ。」という言葉である。この言葉は今までの私が思っていた日中関係改善に対しての考え方に大きな衝撃を与えた。今まではすべての日本人が中国を好きになってくれるといいなということを漠然と考えていたけれど、このことを聞いて確かに人間には好みがあるからすべての日本人に対してそれらを強制することは不可能だと考えるようになった。だから理由なく中国が嫌いということにメディアの黒い情報が滑車をかけ悪循環を招くことを防ぎたいと思った。

私は 12 月 20 日に 20 歳の誕生日を迎えた。20 歳という節目の誕生日を中国で迎えるとは思ってもいなかった。20 日の夕食のときにサプライズで大きなケーキを用意していただいた。多くの人に祝福してもらい幸せ者だと思うと同時に、このような縁にも何か意味があるのではないかとも思った。今後の人生においても日中の架け橋となり続けなさいという誰かからのメッセージなのかなと。また、同日の人民日報に訪中団の記事が載っていた。その内容は私が書いた作文の内容がメインだった。自分の誕生日の新聞に自分の名前が載っていて恐縮ながらも非常に嬉しかった。

このようなこともあり私はある決断をした。来年の９月から１年間中国への交換留学に応募することだ。旅行へ行く前は様々な不安があり応募するかどうか迷っていた。とくに１年間いう長い期間言語が異なる地域で生活することに対する不安が拭いきれずに一歩踏み出すことが出来なかったのだ。しかし今回の訪中で自分に対する不甲斐無さを実感した。知識、経験ともに他のメンバーと比べて圧倒的に足りないなと思った。日本人の心の中国に色を塗り続けたいと思うこととは反対に自分自身の心の中国はあまりに単色的だ。もっともっとパレットの色を増やさなければ黒を中和することは難しいのではないだろうか。そのためにも交換留学に挑戦しもっと視野を広げ、経験を重ねる必要があると思った。不安が消えることはないと思うが、踏み出す勇気なら今回の旅を通して手に入れた気がする。

12 月 26 日北京空港に向かうバスの中でそれぞれの旅の感想を言い合った。私は旅を通して思ったことや考えたことに加えて交換留学のことをみんなの前で話した。みんなの前で言うことで自分自身に言い聞かせ、必ず実現させようという強い気持ちを持つためだ。もう後戻りできない。あとはこれから自分が進むべき方向のみを見つめて走り続けるしかない。感想を言い終わったあとにみんなで“朋友”を歌った。いろんな思い出がフラッシュバックして涙がこぼれそうになった。７日間を共にした仲間との別れはとても寂しかったけれど必ずまた会おうと約束して別れた。１つの大きな決断をした私の心は寂しさとは裏腹に澄み渡る真っ青な北京の青空のようにすっきりと晴れ渡っていた。

宇佐美　希

訪中感想

1.一番印象に残っている点

プログラムの内容ではないが、毎晩のようにメンバー全員で一部屋に集合し、日中交流の在り方について議論したことが一番刺激になった。紀子さんの批判精神や、倉澤さんの膨大かつ体系化された知識に触れ、自分の長所・短所が見極められたように感じる。私たちは外国語大学という校風上、「中国語ができれば優等生」と考えてしまいがちだが、倉澤さんが片言の中国語で自分の意見を外文局の方に伝え、ディスカッションが成立しているのを見て、「中国語能力自体は単なるスキルでしかない。もっと重要なのは、日中関係に対する独自の意見を持っていることだ」ということを再確認できた。この訪中旅行の他にはない良さ、というのは自分よりも優れているメンバーと一週間を通して刺激しあえたことだったと思っている。

2.南京大虐殺記念館の感想

日本では「南京大虐殺記念館というのは、あることないことでっちあげて日本を糾弾する施設だ」「反日教育の基地になっている」という認識がされがちで、私も訪問する前は、どれだけ日本人が鬼畜のように扱われているのだろうか、と戦々恐々としていた。しかし、実際見学してみると思っていたよりも事件を客観視していて、東アジアの平和を希求するメッセージが強いと感じた。とはいえ、やはり「日本（加害国）そのものへの恨み」はアウシュヴィッツや原爆ドームなど、他の負の遺産に比べ強いように思う。訪中メンバーの中には「小日本！身内を日本兵に殺された。民族の恨みは一生消えない。」とタクシーの運転手に言われた者もいる。こうした感情を抱くのはやはり教育が原因なのだろ

うか。
今の日本では、「３０万人も殺していない」などと、責任を回避・軽減しようとする声が目立つ。しかし、加害国として、中国人の対日感情を深く理解し、殺害した人数に関わらず、事件そのものを謝罪、そして遺族の気持ちに共感し寄り添う姿勢を見せることが必要である。「殴った人はすぐに忘れても、殴られた方はずっとその痛みを覚えている」という言葉を見学中に思い出した。

3.訪中後の中国に対する印象
思っていた以上に暮らしやすそう、というのが一番の感想だ。日本のテレビでは、「北京の大気汚染は深刻で、ずっと暮らしていると病気になる。年がら年中スモッグに覆われている。」といった報道がなされている。それを真に受けている日本人が多いのも事実で、私も渡航前にバイトの店長から「中国なんて、あんな空気が汚いところ行って大丈夫？」と心配されてしまった。しかし、初めての中国は思っていた以上に空気がきれいで、マスクを着用しなくても何事もなく生活できることに驚いた。天候に恵まれたお陰も大きいとは思うが、日本のメディアがあまりに騒ぎ立てた報道をしており、そのせいで渡航しないうちから中国に行く気が失せている人が多いと感じた。パンダ杯受賞者のような知中メンバーより、ネットやテレビの影響で、渡航したこともないのに中国に悪印象を持っている人のためにこそ中国招待旅行を企画すべきなのではないだろうか（笑）。

4.青年間の交流について
ただの中国旅行では体験できないことなので、非常に有意義だったと思う。一人一人と関われた時間は少なかったが、出来るだけ多くの学生と連絡先を交換し、今でも交流を続けている。学校の中国語の授業では、課文を暗記したり、テストで良い点を取ることが目的になりがちだが、we chat を通して日記を中国語で書いて反応をもらったり、中国語で会話をすると、「自分が中国語を学習するのは中国人とコミュニケーションをとるためなんだ」という勉強の本来の目的を毎度実感でき、モチベーション向上に非常に役立っている。また、私たちの学生団体では、夏に東京と北京で、ディスカッションや街頭インタビュー、ホームステイを行っている。今回知り合った学生と今後も密に連絡を取り合い、私たちの活動への提案やアドバイスをしてもらい、さらに会期を充実したものにしたい。

5.訪中旅行について
呉さんと王さん、孫さんといった引率のメンバーがとてもいい方々だったので、楽しく一週間を過ごすことが出来ました。今回はこのような旅行に招待して頂き、本当にありがとうございました。ずっと思い出に残る旅になると思います。ぜひまた皆さんに会いに北京に行きます！！

山根芽依

訪中感想

答えが出ることはなく、ただひたすら感じて考えた。そんな１週間だったように思います。南京大虐殺記念館の訪問や、学生の方々との交流で、民間レベルで普通に話していたら日中の壁などないのに、国民感情の悪化を止めることはできないのかという疑問

や他にも多くの疑問が湧き上がってきました。様々な場面で多くの意見が出ましたがもちろん、この答えはこれから模索していく課題です。

この訪中を通じて特に感じたのは、「中国」に１度も触れたことのない人は中国を敬遠しがちなのだということ。中国に実際に足を運ぶ、または中国の方と話しさえしたことがあれば、「中国は…」と区別することもないはずなのにと思いました。留学生の方と話していたときに、日本人は中国人と欧米人がいれば欧米人と関わりたがる傾向にあることに区別されていると感じるとおっしゃっていました。それこそ、中国人より欧米人という日本人の固定観念にすぎません。話せばみんな外国人であり、同じ人間なのに。私が小学生で中国を訪れたように、幼いときに実際に体験する機会というのがもっとあればいいと思いました。そうすれば理解も深まるし、将来も興味を持ち続けると思います。今の高校生の生活で中国と関わりを持つことはほとんどなく、難しいです。学生の方々と交流させていただいたことで、こんなに日本を理解してくれている学生がいることが嬉しくもあり、驚きでもありました。日本の若者、特に高校生や中学生に、実際に中国ではたくさんの人が日本に興味を示して学んでいるんだということを教えてあげたいと思いました。そして伝えていくことが使命だと思っています。

最後に、今回訪中でご一緒させていただいた９名の先輩方、宮内さん、吉田さん、人民中国の方々からもたくさんの刺激を受け、学ばせてもらいました。本当に今回参加させていただけて良かったです。

そして遠藤さんを始め人民中国の方々、一生にもう二度とないかもしれないというような、貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

松山　茜

訪中感想

今回の訪中では様々な初体験があり、本当に濃い一週間でした。観光をしていて中国のスケールの大きさに驚いたこと、人民大学の学生さんとの討論会で知った彼らの本音、訪中団の皆さんとの意見交換など、振り返ればキリがないです。日中友好に向けてこれから私たちが出来ることを精一杯やっていきたいです。

佐藤　瑞貴

訪中感想

今回私は初めて中国を訪れ、中国の人々と関わった。日本人の対中感情が悪化していく中でのこういった経験は非常に有意義だった。今後もまずは私個人から日中友好の輪を広げていけるよう継続的に交流していきたい。そしてこれから先、日中両国が共にアジア地域の発展に寄与する関係へと発展するきっかけとなることを願う。